

役割演技を用いた「特別の教科 道徳」の授業実践

U23C202D 教育実践コース（ストレートマスター） 石黒 皓大

1.はじめに

平成30年度から、「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）が始まった。道徳科の目標である、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことの達成へ向け、「考え、議論する道徳」への転換が進められている。赤堀（2017）は道徳科で重要なことは、「自己の生き方について考えを深める」ことだとしており、授業においては、実生活をふりかえりながら自己の生き方について考える、「自己理解」が重要だと指摘している。

しかし、道徳科はその目標と異なる実態があるため、様々な課題が指摘されている（例えば、井上 2017、松下 2015、山田ら 2016）。井上（2017）は、道徳科の授業の中で自己理解の機会、活動がないことにより、道徳科の学びが生活場面に反映されないことを課題としてあげている。

筆者はこの課題解決の方策として、「役割演技」を取り入れることを考えた。役割演技とは、「登場人物になりきり、即興でその役を演じるもの（飯田、2020）」である。役割演技により即興で演じることで、道徳的価値について、予定調和的な回答ではなく、子どもより「素」や「本音」に近い意見が表出するのではないかと考えた。

2.研究の目的

本研究では、道徳科の目標へ向けて、役割演技を用いた授業を実践する。その授業において、役割演技を取り入れたことにより、子どもにどのような学びがあったのかを振り返ることで、役割演技での道徳科の可能性を提案することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、役割演技を用いた授業をデザインし、実践した。

そして、選出した対象児童の学びを振り返り、役割演技により何を考えたのかを評価する。

単 元 名：何のためにきまりがあるのか

対 象：A 小学校 第4学年児童 32 名

日 時：2023 年 12 月 1 日（木）10:30～11:10

内容項目：「C（11）規則の尊重」

教 材：雨のバスでいりゅう所で（光村図書 5 年）

ね ら い：きまりについて、役割演技により心情を理解する活動を通して、多角的にきまりを考える。

学習課題：きまりってどういうもの？

「本時の役割演技」

演者設定

よ し 子 さ ん 役：アカリ（仮名）（対象児童）

お 母 さ ん 役：ミカ（仮名）

バスを待つ人 A さん役：ユウト（仮名）

バスを待つ人 B さん役：ジョウ（仮名）

バスを待つ人 C さん役：リュウ（仮名）

聴 衆：その他児童 27 名

演じる場面

教材の場面をもとに、授業者が作成したシナリオを用い、教材の場面再現を行う。

実施方法

授業者が、場面の理解を深め、登場人物の心情を理解するため、教材の再現を行うことを提案した。

児童の中から演者を募集し、参加を希望した児童の中から授業者が演者を決定した。

その後、演者に対してそれぞれの役にしたがって、「役割カード（図1）」を配布した。役割カードには、演者が演じる教材の登場人物がどんな人物であるか、演技でのセリフは何かを記載した。演者には役割カードを熟読させ、活動に際し疑問がないか確認した。

演者に対しては、演技の良し悪しを見るのではなく、場面を理解し、登場人物の心情を考えながら見るように声がけをした。

役割演技を1回実施した後、聴衆から意見を引き出し、演者に確認するように、意見を整理した。

あなたの役割：よし子さん

○どんな人？
お母さんと雨で寒い中バスを待っています。
バスが来たらすぐに列を飛び出して、バスの方へ走ります。

○セリフ
お母さんに話しかける。
①「バス停だ。」

列を飛び出しバスの方へ走り出す。
②「はやく乗らなきゃ！」

図1. 演者に配布した役割カード

4. 授業の実際

学習課題「きまりってどういうもの？」に基づき、教材をもとに「きまり」について、さまざまな議論がなされた。

「なぜきまりがあるのか？」という問いについて児童は、以下のように発言した。

- ・きまりを守らないと怒られるから。
- ・相手も自分も気持ちよくなるため。
- ・きまりは守るためにあるものだから。

「きまりは守るためにあるもの」という意見に対して、「なぜきまりを守らなければいけないのか？」と問うと、児童は言い淀み、発言しなかった。ここから、きまりを守らなかったらどうなるのか、役割演技で確認することを提案し、活動へつなげた。

役割演技後は、再度、学習課題「きまりってどういうもの？」についてグループで話し合せた。授業終盤では、「きまりについて考えたこと」を記述させた。

5. 対象児童について

今回の授業では、アカリ（仮名）に着目した。アカリは普段の様子から、「きまりは絶対に守るべきものだ」と認識し、きまりを守らないことが許せない」と考えている推測した。

教材文章の読み聞かせ直後、初発の感想は、「きまりは守れよ。なんなんこのよし子ってやつ。」という、きまりを守らないものへの、怒りの感情を表すものであった。

役割演技への参加を希望したアカリを、きまりを守らず問題を引き起こした「よし子さん役」に指名した。

普段の様子と異なった意見・立場を演じさせることで、どのような意見が出るのかを期待した。

役割演技後、アカリは役割演技においてよし子に注意する役割、バスを待つ人 A さんを演じたユウトの、「（よし子の列を飛び出して並ぼうとする行動は）イラッとした。待っていたのに。」という感想を聴いた。ユウトがそう発言した後で、アカリは「（きまりを）守らない人がいると、（きまりを）守る人がかわいそう。」だと発言した。

その後、きまりがどのようなものかを話し合うグループワークにおいて、あかりのグループでは、主に「きまりが何のためにあるのか」が話し合われた。その話し合いにおいてアカリは、「きまりがあると嫌な思いをする人だっているでしょ。」（机から立ち上がりながら）と述べて、声を大きくすることで強くその意見を主張した。

振り返りへは、「決まりでくるしんでいる人もいるかもだけどなんで決まりを大切にするの。どうしても良くなってしまうから。決まりがある」と記述した。

以上のアカリの様子から、役割演技により普段の自信とは異なった他者視点を獲得したことにより、きまりについてメリットだけではなく、デメリットについても考えることができたのではないかと考える。

6. 成果と課題

（1）成果

意見の異なる立場を演じることにより、体験をもとに意見を出すことで、道徳科の目標でもある多面的・多角的に考えることができたのではないかと考える。

（2）課題

役割演技を行う演者と、それを見る聴衆とでは視点が異なるため、意見の統制が困難であった。

役割演技後に、意見を引き出す問いに苦慮した。「どう感じた？ どう考えた？」と問うても、児童の率直な感想を引き出すことが困難であった。

7. 今後の取り組み

さまざまな道徳科の内容項目の授業において、役割演技を取り入れ繰り返し実践することで、役割演技での授業づくりを豊かにしていきたい。